

ブルー・エア・アーカ
イブ ～空白の三年間
～

ふえるみん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

精霊と化したクロエとその一行。どこかで休ませねばならない戦艦たちを休ませるべくたどり着いたのは学園都市「キヴォトス」。

語られることのなかった空白の区間の物語がここに始まった。

※ブルアカ復帰してやっぱりユウカはいよいよねってなった結果思いついた一発ネタ。
多分月イチかな？更新頻度は。

目次

Episode 00 空白の始まり

1

Episode 02 【フェレシユテ】

(1) | 11

Episode 03 【フェレシユテ】

(2) | 24

Episode 04 【フェレシユテ】

(3) | 30

EPISODE 05 【廃墟の鍵】(1)

38

E o s o d e 0 0 空白の始まり

広大な海。それは人々が生きていく上で不可欠な要素である。そんな海を疾走する
何かが4つ。

「んああ……、何も無いな……。」

そう言いながら屋上で海に向かって釣り竿を垂らしているこの男は「ヴィンセント・
グライスナー」。2年前、とある大戦を集結に導き、人静かに歴史の表舞台から手を引い
た男である。そしてその隣で肩を借りて眠っているのは「クロエ・クローチェ」。同じく
2年前にとともに大戦を乗り越えその身を隠した人物である。ついでに言えば精霊でも
ある。二人で呑気にしていると、通信端末から連絡が来た。ヴィンスはそれを取った。

「どうした？博士。」

『熱核ジェットエンジンに異常発生〜！』

「っ……連続で稼働させすぎたか。」

『冷却の意味合いも込めてどこか陸地があればそこに上陸してほしいな〜！』

通信の主は束だった。先の大戦で大破したこのビッグ・トレー級4番艦こと「ティー

レ」を完全に改修し、近代化させた人物でもあり、数少ない仲間でもある。彼女が確認してくれるおかげで安全に暮らせるのだが、今回の報告はいささか不味かった。すぐさまヴィンセントはクロエを起こし、端末を起動する。

「んい……？どうしたの〜？」

「どこかでこいつを止めなければならなくなつた。このあたりの地理からしてクロエはなにか心当たりはないか？」

「このあたりだと……あまりおすすめはしないけど、一つあるね。学園都市【キヴオトス】。その名のとおり幾多の学園で構成されていて生徒が実権を握つてゐるって聞いたことある。それに、普通の銃弾が全く聞かないから、どこも手を出さないって。」

不安が残るが、現状そこしか道はない。ヴィンスは進路をそのキヴオトスとやらに向けることにした。

約半日かけて港岸までたどり着いた一行は、ティーレだけ陸上に上陸させ、あとの三隻はこのまま防衛につくことになった。しかし、上陸した時間が時間なため、本格的な修理は明日以降に行うこととなり、その日は全員警戒は自動防衛機構を設定し就寝にいた。

翌朝。警報の音で飛び起きた。

「何があつた!?!」

「全方向から攻撃！ 囲まれてるよ!!」

「はあっ?!?!」

ヴィンスは困惑の表情を隠せずにいた。ビッグ・トレーは全方向から、謎の攻撃を受けつつあった。

学園都市「キヴォトス」、幾多の学園から成り立つこの都市には少なからず海洋食料調達のための港がいくつもある。が、今日に限って海洋食料が流れてこない。

区画内の店からその知らせを受けた「ミレニウムサイエンススクール」の「セミナー」達は対策を余儀なくされた。ひとまず何が起きているのか、ミレニウム管轄の漁港へと赴くことになった。そして、そのリーダーというのが、他ならぬミレニアムの顔といふべき存在である【早瀬ユウカ】だった。生徒会長もいるには居るのだが、結局余裕のある人物がユウカしかいないため担当することになったわけである。何人かの人物を引

き連れてユウカは漁港へとやってきたわけだが、そこで信じられない光景を目にしたのである。

「な、何よこれえ?!?!?」

漁港に突如聳え立った謎の船、それも明らかに戦闘目的の戦艦らしき見た目。そして漁港に停泊している二隻の駆逐艦と思しき船と明らかに工作艦が一隻。流石にこれはミレニアムどころか、キヴォトス全体の脅威になると感じたかユウカはセミナーで残ってもらっていた「生塩ノア」に連絡した。

『となると、おそらく?』

「ええ、どう見てもこれは侵攻行為よ。どこの学園かは知らないけどこんな見た目の船、ゲハナヤトリニテイでもありえないはずよ。不安要素は排除したいの。」

『となると、ヒナさんやティーパーティーに連絡して応援を要請、ですか?』

「ええ、お願い。私は引き続きここで出方を見るわ。」

通信を切り再び見やると、真正面にはガコンと唸らせた砲台の砲口が。

「バレたつていうの……!?!しかたない、全員、装甲が薄いとこを狙って射撃開始!」

ユウカの伝令で付近にいた生徒たちは一斉に銃弾を放ちはじめた。ユウカ自身も愛銃であるMPXを両手に携え障害物辛味を踊りだした。

場面は戻り、撃たれているのを確認したヴェインスは急遽トリスを起動しようとするが、二人に止められた。

「ここは私に任せてよお兄ちゃん。」

「御兄様はここから指示をお願いします。こんな銃弾の雨あられの中で被弾でもしたら大変です。その点、私達はエルさんによる恩恵がありますし。」

「何より、使いたくはなかったけど精霊の力があるしね！」

クロエとクローの二人の発言によりヴェインスは踏みとどまった。二人に対応を頼む旨を伝えると、二人して笑顔でブリッジから出ていくのであった。

やがて、外に出た二人に加えられたのは手厚い銃弾のお出迎え。二人に殺到する銃弾は次々と被弾し左目、心臓部、肩、眉間へとヒットする。ほんの出来事に対応できなかつた二人は衝撃で倒れてしまった。しかし、その傷口からは血ではなく、金属が流れ出していた。

二人が出てきてヒットさせたのを見たユウカは射撃中止命令を出した。倒れた二人が起き上がる様子もない。慎重に近づき、二人が使ったであろう出入り口から制圧に向かおうとした。が、ふと冷たいものが背中に当てられ体の動きが止まった。

「私達の船に何の用かな？言っても言わなくても殺すけど！」

「ひゃうっ!?わ、私達はただここに居座っているこの船の状況を調べに来ただけで…。」
そこでユウカは気づいた。なぜヘイローもつけていない一般人があれだけの銃撃を受けてなお立っているのか。それを悟った瞬間、最悪の予測がたった。

「… あは！見られたら仕方ないよね…!!!」

当てられた銃から何かが染み込んでくる感覚とともに鋭い痛みが全体へと広がっていく。

「んぐつつ!?な、何をしたの!?!」

「… ?ちよつと即死する毒を振りまいただけだけど?」

「んなっ…!?!」

「うわっ！」

「アアアアアアアアアアア!!」

「ふう…… 状況終了、手応えがないですね？」

「っ…… な、何…… 何なのよ……!?!」

鋭い痛みを耐えながら声を振り絞って聞くユウカ、恐る恐る振り返ってみれば、そこには青いドレスに両手にサブマシンガンであろう銃器を抱えた少女に、後ろにはスマーтона外装をしたパワードスーツを着込んだ少女。そして自身は絶えず襲い続ける鋭い痛み、そして消えゆく右腕の感覚…… 感覚？

「っ!!! 右腕が!?!?!?!?!」

気づけば背中の中の痛みは右腕の激痛へと変わっていた。持っていた銃はすでに持てなくなっており、右腕からは金属のようなものがザクザクと出ていた。おそらくこれが背中の中の激痛の原因なのだろうと踏んだユウカはスキルを発動しようとするが、

「がふっ!!これは… 血…!!」

とうとう吐血するところまで来たらしい。このまま気を失ってしまふのだろうか。せめて一矢報いようとおそらく気がそれたであろう少女に左腕で持っていたMPXの残弾すべてを叩きつけようと向けたら、何故か慌てていた。

「あ、ちよつと!?そこまでする気はなかったんだけど!?エルちゃん!?ストップ!ストップオオオツツプ!!」

「あう… え…!!?」

不意に消えた痛みとともに自身も意識を保てなくなり、その意識を閉じた。

これは、空白の三年間を綴った物語である。

Episode 02 【フェレシユテ】(1)

どこか、不思議な気分だった。まるで夢を見ているような……。

「あ、きたきた!」

目の前には私と同じくらいの背の少女が…… それもいっぱい。

「あなた達は…… 一体……。」

「うーん、なんと言えればいいんでしょうか、あの人たちに助けられた、とでも言うべきなんでしょうが、今はここの主、とでも名乗っておきましょうか。」

「…… あの人たち…… ? 一体何の目的で……。」

不透明にぼやける輪郭の中、薄っすらと見えるその人影は振り向いたかのような仕事をすると離れていく。

「私達はまだ修復が終わってないので介入はできませんが…… あの人をよろしくお

ねがいしますねっ！」

「あっちよっど!？」

その人影が消えた瞬間、自身の意識も再び途絶えた。

「っはっ!？」

気づけば見知らぬ天井だった。確か、セミナーの部員とともに謎の船の調査に……

!!

「腕の痛みが……消えてる？」

ふとあのときははずたはずたにされていた右腕を見るとすでにその面影は消えており、破れていたはずの自身の制服もきれいに修繕されていた。不思議に思いながらもあたりを見渡すとどうやらここは一種の医務室らしかった。愛銃であるMPXも二丁とも隣りにあった机に置かれており、すぐさま状態を確認した。

「……よかった、何も細工されてないみたい。」

再び携帯し直し、周囲を見渡し出口を探す。と、左側から扉の開く音が聞こえて足音が入ってきた。とっさにMPXを構えて相手を待つと、現れたのは何やら何枚かの書類を携えてきた……

「あ、あなたは……!？」

「あ、起きたみたいだね! さっきは手荒な真似しちゃってごめんね……?」

「あ……うん? うん?」

眼の前の少女は自分に対して敵意を向けていないらしい。銃をおろし、今の状況を聞く。

「なるほどなるほど……あなた達は船の修理と補給のためにここに上陸したと。」

「キヴオトスの存在自体は知っていたけど、誰が取り仕切っているかまでは知らなかつ

たから……一番手つ取り早いここに上陸したの。いま急ピッチで修理作業が進められているはずだから、数日のうちにここを立つと思うよ。」

「あなたは一体……？」

ここまで話してくれてなんだが、ユウカはまだこの少女の名前を知らなかった。故にポツリと聞いてみた。

「ふふ、私はクロエ、クロエ・クローチエ！お兄ちゃんの妹で、世界の敵かな？」

クロエはそう言うと、いつかの精霊の礼装を展開した。ユウカはそれを見ただけで危険を察知し再び銃を構えた。

「この姿……やはりどこかで見覚えがあると思つたら、あなた、精霊なんですね？」

「ありや、情報でまわってるのか。はやいね。」

「私達ミレニアムは諜報もきつちりやりますからね！最近はブラツクマーケットに用途不明のコアや謎のロボットパーツが出回るようになって大変なんですから！」

ユウカは自信満々に伝えたが、当の本人はどこ吹く風で右腕から液体を垂らしていた。垂れた液体は形を成し、クロエと瓜二つの姿形になる。

「あなたの情報は得たよユウカちゃん！」

と、形をなした瞬間、ユウカに飛びつき、スリスリと頬ずりをするもうひとりのクロエ。

「ちよ、ちよつと!?!はなれてください!」

「ええ、良いじゃないですか、一度は同化した仲間なんですし、このこの!」

「……?」

ユウカは先のもうひとりのクロエの発言に耳を疑わずにはいられなかった。

「ちよつとまつて、同化したってどういう……。」

「ユウカちゃん、このエルちゃんは自身が直接体に接触し、体内組織を半数侵食することで新たにエルちゃんが擬態できる種類が増えるの!もちろん、エルちゃんが味方と認められた人物には一切の怪我也させないしね。あ、そうそう、こんな話をしている暇はないだった!」

と、精霊姿のクロエはユウカにしがみついて離れなくなったエルをほっぽりだして一個の端末を渡した。

「この通信、多分ユウカちゃん宛じゃないのかな?さつき通信機から聞こえてきたから拾ったけど、内容を聞くにサンクトウムタワー?つてところが襲撃されているらしいよ?」

「……」

「連邦生徒会の本部じゃないですか?!?!?!?」

ユウカは目が覚めた。こんなところでぼさっと突っ立っているわけにはいかない。

「この出口ってどこですか！私、いかないと！」

自身の愛銃を担ぎ端末を持って出ようとするユウカはふとエルちゃんがまだしがみついていることに気づいた。

「ユウカお姉ちゃん、私、手伝ってあげるね！」

エルの発言から、ユウカは少しキョトンとしたが、やがて状況を察してエルの跡を追っていく、出た先はハンガーでそこには沢山の整備兵がいた。

「これって……!!」

「そ、私達の命を預けている機体をおいてる場所！ついてきて！」

エルが駆け、クロエが浮いて滑走し、ユウカは走って追いかける。走って追いかけた先にあったのは1機のワードスーツだった。そしてユウカはそれに見覚えがあった。

「これって……あのときの……!?!」

「AMX-018-B『HEADS』、正式名ブラックリッター。文字通り隠密特化の機

体！これでタワーまで直送だよ！」

エルはさあさあとユウカを担ぎ上げコックピットの中にそのまま放り込む。そして自身は装甲に触れて溶けてかき消えた。

「ふえっ!？」

「しつかり捕まつててよー！カモ起動！」

コックピットが閉まり一瞬驚くユウカだったが、次第に計器の光で全体が明るくなると、それを見て唾然としていた。

「なんなのこの機体……わたしたちの知っているロボットやISの出力よりおかしい……!!」

『ちよつと待つてISって!?!』

ユウカから漏れた一言。されどその一言はエルや外にいるクロエにとって十分すぎるほどの決め手だった。

「まさか……ブラックマーケットに流れてるパーツって……。」

「ええ、どこの誰かは知らないけどキヴオトスにゴリアテや軍用戦車以外にパワードスーツなるものが出回り始めたの。最初はジャンクパーツの寄せ集めかと思ってたけど、鎮圧ができなくなつて、調べたら、ね。」

『そういうことは早く言つてくださいよ!!!』

タワーへ向かう途中だったが、エルは飛び出したばかりの戦艦に向けてひとりで無線を飛ばす。

『敵内訳二機影アリ、砲撃支援ヲ求ム。』

一方、サンクトウムタワーでは激しい銃撃戦が行われていた。そこらかしこに構成されたバリケードにとつもない量の取り巻き、そして何より占拠された重要施設内での戦闘は内部設備の保護の為に中々攻められない、というのも一種の理由だった。そんな中、まず建物に入れず外で戦闘をしていたスズミ、ハスミ、チナツは苦戦は強いられて

いた。というかなぜ3人がここに居るのかという疑問が残るが、話は約数十分前に遡る。

「生徒会長が居ない上に顧問担当が逃亡した!？」

「ええ…。何が起きたのかは知りませんが、生徒会長は謎の行方不明、顧問になるはずだった人物は書き置きを残し逃亡…。現在行方がわからなくなっています。このままではタワーを奪還できなかったとしても…。」

「それに、先日からユウカも居なくなっているんですよ？」

「はい、漁港の調査をする、とだけ残して。あのあと行方がわからなくなり現在操作手続きの最中です…。」

生徒会の一人であるリンはタブレット端末を操作し状況を整理していた。なにもかもタイミングが悪すぎたのだ。

「仕方ありませんか…。ちようどここには代表代理が3人もいます。」

「「…え？」」

三人はリンの顔を見てポカンとした。

というわけで現在進行系で殲滅戦を行っているのだ。だが、前衛をやれるユウカがい

ない以上、思うように前に進めずにいた。

「くっ…： 寄せ集めでどこにこんな連携力が…：！」

「どこかにこの寄せ集めをまとめ上げ、指示をしている人物がいると見たほうが良いです。…： ユウカさんがこんな時にいれば…：！」

「待たせたわっ！」

「!？」

頭上から聞こえた彼女の声に全員が上を振り向けば。

「ぼさつとせずに出る!!」

二丁のMPXを構え空からばら撒くユウカの姿。流石に頭上からの襲撃は予想して

いなかったか続々と倒れていく敵。

「ユウカさん!？」

「やっぱり攻めあぐねていたわね、長期的に見ればミレニアムのためになるとはいえ、ちよつと多すぎない?」

「どうやら指揮をしている主犯格が居そうです。」

状況確認をしていると真正面からグレネードが降ってきた。全員が避けるも爆風で煽られる。

「何が……んなつ!？」

「クルセイダーに……空を飛ぶパワードスーツ……!？」

「照合確認……間違いありません!最近悩まされているISなるものです!」

「やっぱり……!!」

「現状クルセイダーまでは対抗できますが、あの機体までは……!!」

全員が増援として出現したISに頭を抱えるが、一人ユウカは笑っていた。

「ユ、ユウカさん?」

「やっぱり、そこまで計算通りだったわけね……恐ろしいわ。」

「え?」

「ええ、いいわ！ やっちゃって!!」

「全員下がつてて！ 弾着4秒!!!」

『っ!?!』

更に聞こえた空からの謎の音声によりクルセイダーの真正面から退避した全員。退避した瞬間、轟音がISを撃ち抜いた。貫通した機体は爆発し中に乗っていたであろう不良が落ちてきた。

「「えっ……?」」

「ふう……次はあれかな？ 側面主砲塔4番から6番まで発射用意！ 仰角調整右に2度！ 上に4度！」

上を見れば長大なスナイパーライフルを構えた謎の機体が。それに空から降ってきたユウカ。3人は全てに合点が行った。

「ユウカ、あなたまさか……!!」

「答え合わせはあと！今はタワーを奪還するわよ!!」

ユウカがリロードを済ませたMPXを持ったのを見て、3人も改めて構え直した。

そして数秒後、クルセイダーがあつた場所に向けて爆発が三度ひびいた。残つたのは残骸のみ。

『……………』

そのあまりにも馬鹿げた威力に四人はあつげにとられていたが、前を遮るものがなくなったことにより、タワーへ突入するのだった。

T o b e c o n t e n u e d

Episode 03 【フェレシユテ】(2)

タワー内部に突入した彼女たちだったが、安全地帯を確保したところでユウカはハスミ達から詰められる。

「ユウカさん!?どこに行つてたんですか! それにあの機体は!!!」

「お、落ち着いて…。私が全部話すからあ!」

ユウカが3人をなだめてことの詳細を話す。と、同時に黒い機体が四人の近くに降り立ち、機体をしまうと二人に分裂した。

「ユウカちゃん!」

「えっ…。ユウカさんが、ふ、ふたりっ!」

「あちゃー…。」

ユウカに擬態したエルがブラックリッターを解除したクロ工のもとからユウカのもとへ飛び付こうとしてダツシユしているのを三人が見てしまい、混乱していた。ユウカは項垂れるようにやっちまったと言わんばかりの表情。当然3人は警戒し己の持つそれぞれの銃口をエルに向けて引き金を引いた。

「あつ、ちよ!？」

ダダダダダダ

ダアン!!

スナイパーライフルの音とアサルトライフルの音が響きエルはおろかその後ろにいたクロエでさえ巻き添えを食らう。クロエ自体はすぐシールドだけを展開し難を逃れたがエル自体は対応できず穴だらけになった。

「……………ゆR u さ な i い!!！」

エル、キレた。左腕から銃を生やすとたちまち打ち返す。ユウカはいち早く気づき物陰に隠れるも、残りの三人は撃つのに夢中で完全に気づくのが遅れた。

「撃ち返してきたっ!？」

3人も遅れて隠れるが、何発かやはり被弾してしまう。だが、悪夢はここからだつた。「なっ……………わたしたちのライフルが!？」

エルの銃弾。すなわちエルの分かれた本体を撃ち込まれた彼女たちは撃たれた場所から侵食が始まりライフルや体を銀色の結晶体で染め上げていく。ユウカは自らにも被弾することお構いなしに3人の前に出てバリアを貼った。

「え、エルちゃん!今のは三人にとつて当然の反応というかなんというか……………だからお願い!その侵食を止めてくれない!今はこんなことで時間を使っていられないの!」

「……。」

説得していく合間にも3人の身体は蝕まれていき半分くらいが侵食されたところでその勢いは止まった。3人ともすでに気絶しており、おいそれとすぐに動かせるような状態ではなかった。

「……むー！」

エルは随分不機嫌だった。自分に対し突然銃を向けてきた上そのくせして命乞いをする。正直このまま侵食しきって自分の体にしてやろうかと考えたが、ユウカが前に出てきてバリアを貼ったことでこれが総意ではないとユウカから伝えられた。正直、信じられるわけもない。だが、ユウカが手を伸ばしてきているところを見るに、なにか交換条件があるのだろうかと近づく。

「……クロエさん。」

「んー？どうしたのー？」

「……あなたのエルさん、お借りしてもいいですか？」

「……それって、どういう……？」

クロエにとつても理解ができない質問だった。いつもそばにいてくれたエルを借りるとは一体……。クロエの返事も聞かず、ユウカはエルの身体に触れた。

「エル、どうしても許せないなら、私の体をあなたに預けるわ。あなたが本当に殺さなければならぬと感じたのなら、代わりに私を殺しなさい。」

「…… はあっ!？」

クロエはユウカから出た衝撃発言に頭を悩ませた。確かにユウカはすでにエルからも認められているが、だが何をどうしたらそんな思考になるのだろうか。だが、それは打って変わってエルは震えていた。左手に生成していた銃をしまうとそのままの姿勢でユウカに抱きついた。クロエはさらに理解不能になった。

「…… ふえっ!？」

「…… ずるいよお……。」

「でも、これであなはずつと私と一緒に居れる。私はあなたに信用を勝ち取ることができる。winwinの関係ですね、かんぺき〜!」

そういう問題ではないでしょ、とクロエは口にしかけたが、野暮なのでやめた。と、エルがユウカに溶けていく。

「ふふ、…… 契約、成立だからね!」

ユウカに完全に溶け込んだエルはによき、と腕から顔を出す。

「…… はあ、迷惑だけはかけないでよエル……。」

「ユウカは唯一信頼できるから！」

随分と絆されたものだ、とクロエは嗤う。最初はユウカにすら敵対していた彼女が、今では同化を喜んでしに行くまでの仲。その印にユウカの髪が一部だけであるが透き通ったり、くすんだりしたのがひと目でわかった。毛色が変わったりするのは、同化した人物の大きな特徴だったりする。しばらくして、3人の侵食も剥がれていき、薄い水のような金属がユウカのもとへもぞもぞと入り込んでいった。程なくして3人が意識を取り戻した。そうして最初に見た光景は少し雰囲気が変わったユウカ。なんの地獄なんだと言わんばかりである。

「いまのは…… いったい……。」

「話を聞いてください！彼女は…… クロエさんとはある事情から今回同行しています。それより…… リン会長代行はどこに？あの人からの連絡を受けて来たんですけど……。」

意識を取り戻した三人は気まずそうに視線をユウカから逸らす。それを見てユウカはどんどん顔を暗くしていく。

「…… なあなか、トラブル臭いね……。」

いつの間にか見知らぬアサルトライフルを携行したクロエがカコンと軽い音を鳴らして弾倉を交換しているのを見て、やる気満々だと察したユウカも自身のMPXの弾倉

を交換する。

「はあ……せめて、どうかあの人々が苦勞しない程度には片付けますよ。」

それすなわち、これから残敵掃討戦へ移るといふ事を示しており、三人が今日は絶対帰れないと嘆くには十分だった。

Episode 04 【フェレシユテ】(3)

幾分かの時間が過ぎた。改めて、準備を整えた5人はクロエとユウカ以外はそのまま上層階で、ヘルメット団の迎撃。ユウカとクロエはシャーレの部室の制御権奪還へと動く。本来なら先生がこのシャーレの制御権を奪還すべきなのだがいない現状、ユウカが唯一信頼できるクロエを引き連れていくこととなった。

走って部室へと入ると、中にいたのは一人の生徒。

「……居たわね、【災厄の狐】ワカモ……!!」

「あらあら……案外早かったですわね……。」

「何をしているのかは知らないけど、これ以上、ここを好きにはさせないよ。」

アサルトライフルを片手で構え、いつの間にかもう片方の空いた右手でブラックリッターを部分展開しレールキャノンを展開したクロエは目の前の人物……ワカモに対して敵意を出していた。だが、目の前のワカモは何もしようとせず、また、二人の目の前を素通りして去っていく。

「なんの目的で…!!」

「目的のものが無い以上、あなた方に興味はありませんわ。然るべきタイミングで、またいらしましょう。では。」

鮮やかな引き際で追いかけるのも失せてしまった二人。ユウカは代行から頼まれた例のものを探す。クロエもリーダーで探していると、それらしきものを捉えた。

「うん…：。もしかしてこれ？」

ふと見つけたのは一台のタブレット。しかしクロエには用途がわからない。ユウカに聞き出すべくそれを持っていくと、ユウカはどこからともなく引っ張り出してきた空のアタッシユケースを取り出すと、蓋を開けてそのタブレットを丁寧にしまっていく。と、触れようとした瞬間、タブレットの電源がついたのかパシユツ、とまばゆい光が二人を包んだ。しばらく光り続けるユウカだったが、やがて目を開くと、画面の向こうにいたのは青い制服に白い髪の少女と…：。

「瓜二つ…：?」

色こそ違うが、服装も髪型も全く同じな少女。そしておまけには、

「ふああゝ…：。んあ?」

「ハヤナちゃん!？」

クロエには見覚えしかなかった。電子精霊ことハヤナである。電子精霊とは言いが、実際はどこでも行き来できるようになったイノベイドこと万能精霊でもある。

「ここ、これは…… 権限もないのに……!？」

「残念だったわね。あたし達は元から機械で作られた存在。だからゆうゆうと乗っ取れるわけなの!」

まさかの発言になんとも言えないユウカとクロエ。そして示し合わせたかのように今まで暗かった室内に明かりが灯された。

「ん、ここのもともとの主が制御権を奪還したみたい。後で生徒会に移管するって!」

「…… わかりました。後ほど確認します。」

すると進むのが気味が悪かったユウカはひとまず対応を終わらせると今度こそタブレットをしまう。

「では、クロエ。あなたとはもう会うことはないだろうけど……。」

「いや、エルちゃん返してもらわないといけなくなつたからしばらく滞在しなくちゃ。」

「えっ。」

ユウカ、二度目の絶句であつた。

一方、その頃のティーレでは。

「ハナヨ、なにかわかったか？」

「……ええ。この周辺に大量のIS反応あり、そして僅かではありますが人の反応が一つ。」

「人？」

「はい、と言っても私達のようなマイスターたちに与えられるような人工ボディでも言いましようか。」

ハナヨが適当に解析を勧めたことにより、この近くの地域に人の反応があることを認めた。果たしてそれが味方なのか敵なのか。それは行ってみるまでわからないため攻めあぐねていた。クロエがいない現状、下手に動くと不利になる可能性もある。故に帰ってくるまではしばらく待機しないといけなくなつた。

「しかし…まさかとは思つたが。」

「東さんもまーさかここで反応が出たときは目を疑つたけどね。行方不明になつていた未回収のコア100個弱がここで見つけられたのは僥倖だつたよ。」

そう、事の発端は東の謎の報告だつた。

「あれ？東さんが手ずから作つて最終的に回収したはずのコアの反応が出てるんだけど？」

「コアの？…ハナヨ、周辺地域のスキャンを頼めるか？」

「お任せください。リーダー展開、周囲5km圏内のスキャンを開始します。」

そして冒頭へと戻るのである。見つけた以上、回収するべきなのだが、反応があるということとは稼働しているということであり、一斉に回収するのは至難の業である。それに、先の援護で再びティーレは音を上げており、暫くオーバーホールが必要な状態だった。元々とはいえあの戦闘で大破してからまともな修理もできていないティーレに十分な補給もできていないZ2とハーディ。ティーレ艦内にあつた弾薬供給及び燃料供給施設が大破により破壊されたのが一番大きかった。と、そこへクロエが帰宅してきた。

「ただいま〜!」

「おかえり。早速だが出かけるぞ。」

「その前に、……えーるちゃん!」

どこかの天井を見上げるようにクロエがその声を発すると、壁が歪み、染み出すように人物が出てきた。このティーレと融合しているエルである。クロエを見るなりエルはクロエに飛びつきそのまま融合してしまった。

「もう!自分を人質にしないでよね!」

『あのときはそれくらいしかクロエちゃんを守る方法がなかったからね……ごめんね。』

肩から小人状態で身を乗り出したエルがそうボソボソと告げる。数言話したクロエ

は、ヴェインズから状況を聞くなり、顔をしかめ、クロエもヴェインズに今持っている情報を伝える。クロエから聞いたヴェインズ達は顔が微妙な顔になった。

「ブラックマーケットにコア、ねえ……。」

「こつちこそハヤナちゃんたちみたいな人工ボデイの存在……。」

「なーんか、調べる価値はありそうだね？ どうせティーレ達はまとめてオーバーホールしないとイケないし調査するには丁度いいと思うよ？」

この丁度いい条件下においてヴェインズとクロエが首を縦に振るのはさほど時間ばかりはなかった。結局、諸々の準備も含めて明日の昼から出発することになったため、一時、解散となった。

その翌日のことである。

「おはようございます、クロエさん。ちょっとお時間いいですか？」

「ほへ？」

朝7時、ユウカがなぜかティーレを訪ねてきた。寝起きのクロエはただ、ポケーっとした返事しか返すことができなかった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:
:

EPISODE 05 【廃墟の鍵】(1)

翌日の昼。ミレニアムの僻地に存在する廃墟のような跡地に3機の機体が降り立った。

「ふう……なんかバレずに来れたな……。」

「ここに、私達と同じ存在が……。」

「本当にいるとは断定できないけどね。でも、明らかにこの建物、なにかの研究所だった痕跡があるよ。ほら、ここにあるガラスだつて周囲の物を見る限り、何らかの機械の外装だよこれは。」

そう言つて最後に降り立った人物……クロエが早速見つけた建物の入口へと走る。続いて展開したまま浮遊するハナヨと装備を整えてアサルトマシンガンを片手に構えたヴィンセントが周囲の安全確認をする。今回、廃墟へと足を運んだのはこの3人だけなのだが、実際にこれらには明確な理由が存在する。割れてる情報だけでも、重要事項が2種類あるのだが、一種類は博士でないと解決できない。そう考えると、残りの戦闘人員は自ずと廃墟の内部にあると思われる人工ボデイの調査へと割り振られるのだ。ずんずんと進んでいく中、クロエは手に持っている一枚のタブレットを見つめる。

「それにしても……こんな大事なものの、私が持つててもいいのかなあ……？」
クロエがそう呟くのは朝の出来事が原因である。

朝、訪ねてきたユウカはひとまず内部へと案内してもらい艦橋ブリッジへとあがらせてもらった。

「へえ……」

「ふおお……寝起きだから着替えてくるね……」

流石に寝間着で対応するのもアレなので着替えるためにしばし席を外すクロエ。そ

して、数分して戻ってくる。

「よし… それで？要件って？」

「ええ、これを預かってもらおうかと思ひまして。」

そう言つてユウカは手に持つていたアタツシケースのロックを外し蓋を開けた。中には昨日のタブレットが入つており、純正の充電器も入つていた。

「これつて、昨日の…。」

「ええ、昨日あのあと連邦生徒会で完全移管を確認して、今後の対応を協議したの。先生が行方不明である以上、誰がこれを持つべきか、つてね。色々揉めたけど、最終的には今回の一見を収めてくれたあなたに一旦預けておこうつてなつたの… まあ、最もあの子を制御できそうなのはあなたしか居ないっぽいしね…。」

「あの子つて… ハヤナのこと？」

「ええ。あの子隙あらば私達の建物の全制御権を奪い取ろうとするから焦つたわよ。うちのヴェリタスの妨害がなければ…。」

「ア、アハハ…。」

とんでもない事実に一瞬引くクロエと呆れているユウカ。更に出てくる一言がなければ穏便に終わつただらうに…。

「おまけにこのタブレット、どうも指紋認証しちやつたみたいで、まともに使おうと思

とあなたしか使えなくなっちゃったみたいで……。」

「えっ……いつ指紋なんて…… あっ!!」

一瞬考えた後、すぐさま察した。よくよく考えれば、絶対に触ったタイミングが一つあつたではないか。

「つー……!!!!あのときに!!」

タブレットを手渡す際に一度だけ手で持ったじゃないか。絶対それしかなかった。

「……はあ、ますます滞在する理由ができちゃったよ……。」

クロエが項垂れ、ユウカが溜息をつく。しかし、そこからの行動も早かった。タブレットを左手で持ち、右手でコンソールを叩いていく。

「ユウカちゃん、ちよつと揺れるから気をつけてね〜。」

「揺れるって……うわあっ?！」

ガコン、という音とともに揺れる船体。ユウカは突然の出来事に対応できずふらついたが、エルが咄嗟に出てきて助けてくれたため事なきを経た。目の前の大きな画面を見ると、そこに写っていたのはDU地区の全体図だった。

「まだ本調子じゃないけど、このティールをこの前の場所に移動させるよ。」

「こ、こんな大きな船をですか!?置ける場所なんて……!」

「だいじよぶだいじよぶ!そこまでスペースは取らないし、また襲われたときにこの子

がいればどうにかなるから！」

「は、はあ……。」

言われるがままに移動していくさまを見ていることしかできないユウカ。果たしてほんとにクロエに渡してよかったのだろうかと思悩むのはこの翌日の出来事となる。

そしてその翌日。本格的に渡されたタブレット、名を「シツテムの箱」と言うが、これを用いての協力が始まった。拠点として借り当てられたシャーレの建物に入ったクロエは即座に全システムをシツテムの箱の中にいたアロナと言う少女とハヤナに掌握してもらい、自身もエルに魔改造を頼んだ。一時間もすれば、掌握は終わり、住みやすく魔改造がされていた。そしてようやく執務開始となったのが、この日のお昼の事である。そうして業務を処理していくうちに、ふと、目についた報告があった。

「うん？人工身体を用いた研究？」

『どうも人工的に体を製造することで、非人道的な研究も合法化できるとか考えたんじゃない？そんなの狂気の沙汰だと思うけど。』

「ハヤナ？あなたイノベイドでしょ？人工の身体でしょ？人のこと言えないよ？」

「はうっ!？」

ハヤナの心にクリーンヒット。アロナは意味がわかってないらしく、首を傾げていたので簡潔に説明してあげた。だが、そんな研究がなぜこんな辺鄙なところで行われているのか。意味はわからなくもないのだが、わざわざこの学園都市キヴオトスでするメリットが見当たらないのだ。不穩に思ったクロエはアロナに頼んで施錠準備をしてもらう。それと同時に通信を開いた。

「お兄ちゃん!」

『クロエか。どうした?』

「トリスリッター発信準備!合流地点は後で転送するから!」

『何がなんだかわからないがわかった!』

これが約2時間前の出来事である。

探索地点に来たのはクロエとヴィンセント、そしてしばらくの間補佐につくことになったユウカだった。出発の準備をしていたらユウカがやってきて、場面を見られて事情を詰められた。そのためトリスで抱えてここまで連れてきたのだ。尚なんの防護もしなかつた為ユウカはノックダウンしている。

「成程な……いくつも生成していた痕跡がある。でなければこんなにカプセルがあったようなあととは残らない。」

と、喋っている。ぶよぶよと浮いている機械が数体、こちらに向けて銃口を向けているのが見えた。しかし……

「はーい制御権奪取しちゃおうね〜！」

クロエが距離を詰めて銃口に触れた途端、ザク、ザクと侵食されていき、数秒もすれば残りの機械に乱射するドローンの姿が。

『ひ、ひえ……怖いですよこれ!? こんなのアロナにされたら……。』

「大丈夫だつてアロナちゃん、こう見えても私は信頼した人以外にはこんなひどいことはしないから！」

そう言つては居るが、片手間で制御権を強奪しながら探索を進めているあたり何も言えなかつたりする。少しずつ進んでいくにつれ、襲いかかってくる自立ロボの数も増えてきたが、そこは本分。クロエのトリスとヴィンセントのツヴァイで次々とハエたたきのごとく撃ち落とされていく。やがて大きな扉へと辿り着いた。

「これが……。」

一回り大きな扉の前についた二人と抱えられたユウカ、そして後から帰りのための残敵掃討をしていたハナヨも合流した。

「藪が出るか蛇が出るか……!!!」

ヴィンセントはビームサーベルを展開すると、扉へと突き立てるのだった。

T o b e c o n t i n u e d